



カラー版はこちらのQRコードからご覧いただけます。

今月の水谷公民館だより

1面 野菜特集

2面 桜の写真を募集します

水谷公民館だより

編集 水谷公民館だより編集委員会
発行 富士見市立水谷公民館 富士見市水谷1-13-6
TEL049(251)1129 FAX049(255)9886 fkm-mi@coral.ocn.ne.jp

【富士見市野菜】のススメ

富士見市は古くから「入間地区」の一部として、多くの野菜や米を生産してきた、歴史ある農業地域です。関東地区で稲作が始まったのは、紀元前1000年頃だったと言われています。長い歴史を経て江戸の台所として、6カ所ある新河岸川の河岸場から、舟で米や農産物が江戸へと運ばれて行きました。大正に入り、東上鉄道が開通すると、市内の肥沃な畑で作られた農産物は鉄道便によって、遠く関西までも流通するようになりました。

担当 柴田編集委員

農地の歴史

昭和31年(1956年)に鶴瀬、南畑、水谷3村が合併し、富士見村が誕生すると翌年、鶴瀬地区に日本住宅公団の団地建設が始まります。これをきっかけに住宅



地は拡大。昭和47年に市制が施行された富士見市は、都内への通勤圏となり農地は激減していきました。近年は高齢化に伴う生産農家の減少や農地の相続問題などで、農業に携わる人口の減少はさらに進行しつづけています。

元気な生産者さん

皆さんは昼間人口と夜間人口という言葉をご存知ですか？

都内へのベッドタウン富士見市は、夜間の人口と昼間の人口の差が、埼玉県で1位なんです。それだけ住宅地の割合が増えているということでもありますね。そんな中、まだまだ住宅地の間に畑や田圃が散在しています。元気に農作物を作り続けている生産者さんがいるからです。北東部の荒川低地側の水田地帯では、稲作が盛



んで、作付けされているお米は「彩のかがやき」「彩のきずな」「コシヒカリ」などが多く、県内においても、3品種を合わせた出荷量が約80%となっているそうです。一方、南西部の武蔵野台地側は、関東ローム層の畑作地として恵まれ、減少した耕地ながらも「カブ」を筆頭に、ほうれん草や小松菜など、多品目の野菜が生産されています。

イチバン近くの農業資源



生産されている多品目の野菜は、カブやほうれん草、小松菜の他にも、じゃがいも、玉ねぎ、エダマメ、とうもろこし、ピーマン、きゅうり、ナス、トマト、ダイコン、ニンジン、里芋、ゴボウ、白菜、キャベツ、ねぎ、春菊、チンゲン菜、レタス、ブロッコリー、しょう

うがなど、驚くほどたくさん野菜が生産されています。さらに果物も注目です。4軒ほどですがイチゴの生産者さんも頑張っています。5月まで収穫できるのですが、予約制です。イチゴ狩りができる農園もあり、販売もしています。埼玉県で開発された新種の「あまりん」や「かおりん」も栽培されているそうです。そのほかに柿や梨なども栽培されているそうです。

カブの生産高

国内トップクラス



ところで富士見市を含めた入間地区は、「カブ」の生産高が日本国内でもトップクラスなんです。このことを、市民の皆さんの中でもご存じない方が多いようです。公立の小中学校では、給食にカブを使った料理が提供されているようです。

カブは春もの(4月から6月まで)と秋もの(10月から11月まで)が生産されます。水谷地区では、露地栽培が中心のようです。

白い根と思われる部分は塊茎(かいけい)とい



季節の旬の野菜や果物は、南畑直売センターや、市役所のロビーで月に一度行われる「つきいち」、また市内各所の直売所などで販売しています。例年は年に一度のイベント「ふるさとまつり」や「ふじみ大地の収穫祭」なども行われています。まだまだ、新型コロナの収束は先が見えない日々ですが、野菜や果物をたくさん摂って免疫力をアップしましょう。

直売について



富士見市生まれ
地元の地産地消を推進する【富士見市生まれ】のシールです。お買い物の目安にしてください。

富士見市生まれ
市では、品質と安全性の高い農産物が元気になって欲しいという思いから、市内で生産された農産物の目印として「富士見市生まれ」のオリジナルシールを作りました。安心安全な「地産地消」。市民のイチバン近くにある美味しい農業資源です。

*資料 富士見市ホームページ